

### 高時川はめぐめく「生命のパノラマ」

あらゆる生命は水から生まれました。水は生命の源、生命のゆりかご。「命たち」を生み、はぐくみ、そして運んでいます。

長さ四一・四km、流域面積二〇八・七km<sup>2</sup>、淀川の最北端であり、湖北の最も大きな川である高時川。福井県境の栃ノ木峠にその源を持ち、上流では丹生川と呼ばれ、杉野川を合わせ湖北の平野を下って姉川に合流しています。琵琶湖に注ぎ込み、淀川を流れ下り大阪湾にまでつながる大きな水の道です。

何気なく眺めれば、見慣れた高時川の風色。でも心を鎮めてじっと見ると、無限の生命を生み、はぐくみ、運ぶ大



余呉湖に浮かぶ水鳥たち

自然の宝庫です。

流域は四季折々に姿を変えます。雪解けとともに始まる春は目ざめの季節。ふきのとうやコブシが春を告げ、谷川のネコヤナギが白い芽をふき、キツネやタヌキが活動を始め、人々もゼンマイやワラビ採りに山に入ります。時とともに木々に若葉が芽生え、山を黄緑色に変えていきます。

夏はにぎわいの季節。アユの放流が始まり川面がまぶしく輝き水遊びの季節がやって来ます。森は目に滲みるような緑に染まり、せみしぐれにカジカガエルの合唱。夜はホタルが乱舞して、目にも耳にも



姉川との合流地点から伊吹山を望む



淀川の源 (余呉町栃ノ木峠付近)

大自然が満喫できる季節です。秋は身支度の季節。山々の樹木が黄色や赤に色づくころ、生き物たちが冬の眠りの準備を始めます。カモたちが姿を見せ始め、ニホンカモシカが突然姿を現すのもこのころです。そして寒くて長い冬。ほとんどの生き物達が息を潜める中、余呉湖や琵琶湖の湖畔では、カルガモやホシハジロなどが大騒ぎをする季節です。

# 高時川は潤いの源流

わたしたちのふる里、湖北。  
けわしい丹生の山並に端を発し  
美しい自然と豊かな田園に  
沿って流れる高時川は  
私たちの命の源として、  
時代を越え  
今日も静かに流れ続けています。

### 人の営みの舞台、高時川

高時川はここに住む「人」たちの営みの舞台です。早くから多くの人たちが暮らしていた湖北には、古橋・川合などから古墳時代の生活を物語る須恵器がでています。それは古い古い時代から多くの人たちが住んでいたことの証です。日本海と古代都を結ぶこの地は大陸の文化を都に伝える道でもあったことがいろいろな文献や伝承からうかがえます。

湖北の平野を流れる高時川は、時として大雨による被害をもたらし、時として大いなる恵みを私たちに与えてくれました。「いかにして水を治め、利用するか」。高時川と人間の係わり合いはまさに治水と利水が織りなす歴史であったのです。

天下の雄秀吉も、高時川の堤防の修築に力を注ぎ込みました。柏原・渡岸寺・落川地先など四ヶ所で合わせて約六四〇mの堤防があり、それらは今でも「太閤堤」と呼ばれています。



高時川の水源地



生活と密着した用水路のある湖北の郷

す。そして、江戸時代末期には高時川は田川の上をまたぐようになり、現代に至るまで様々な人間の知恵が加えられ地域の人々に親しまれ、人々の生命と暮らしを守るため、色々な工夫がなされてきています。

高時川沿川は古代より農耕が盛んに営まれてきました。この川を流れる豊かな水は、湖北約五、〇〇〇町歩の水田に「大きな恵み」をもたらしています。

この地方では、江戸時代から盛んになった製炭業や漁業、養蚕業、伊香具の生糸業が今も受け継がれています。炭焼きは見られなくなったものの、生糸は明治時代の末から三味線や琴などの糸に生まれ変わり、今や全国の生産量の六割以上にも及んでいます。また姉川・高時川で昔から行われて来た「やな漁」は、この地域の風物詩のひとつとして有



丹生ダムで水没する鷺見地区、移転前の一コマ



名であり、ここで獲られたアユは盛んに全国へ出荷されています。そのほか、近年電子機器等のハイテク産業や北陸自動車道の完成により流通産業が集中しており、湖北地方に新しい産業が広がっています。

このように、高時川は地域の人々の生活の豊かさや心の安らぎに欠かせないものとなっています。しかし、これらの湖北地方の産業経済の発展と生活の向上は高時川を取り巻く環境を大きく変えようとしています。今までの高時川を振り返り明日の高時川より身近な、より豊かな河川となるよう様々な努力が必要となってきています。

高時川には様々な「ふるさとの素顔」。豊かな自然と歴史ドラマがあります。次号から上流から下流へくめど尽きない興趣に満ちた「高時川・ふるさと再発見の旅」に皆さんをご案内いたします。

